

はじめに

フォーミュラへの注目

英語学習のうえで大切な要因は何だろうか。頻繁に用いられる分類法として四技能(リーディング・リスニング・ライティング・スピーキング)が挙げられるが、そのすべてを下支えする最重要要因として、語彙獲得が挙げられる。語彙獲得については応用言語学(applied linguistics)や第二言語習得(second language acquisition)等の分野で多くの研究上の知見がある(例えば 中田, 2019 を参照)。

一方で、単語帳での項目暗記学習のような単独の語彙項目の学習だけでは不十分であることが認識されるようになって久しい。心理言語学的知見や教育実践の場からは、2 語以上の語彙からなるフォーミュラ(定型表現・フォーミュラ連鎖; 連語やコロケーションなどを含む)を学ぶことの重要性が指摘されている。

世界中の語彙研究者が一堂に会する Vocab@ (ボキャブアット) 学会でも、2016 年の Vocab@Tokyo 国際大会と 2019 年の Vocab@Leuven 国際大会を比べると、フォーミュラ研究についての発表が倍増している。さらに、2019 年の英国応用言語学会(BAAL) 年次大会では最終基調講演者としてフォーミュラ研究で著名な Florence Myles 先生(University of Essex)が登壇され「Formulaicity in second language learning: Issues of conceptualisation and identification」について講演されたり(翌年には EuroSLA 学会の Distinguished Scholar Award を受賞)、フォーミュラをメインテーマとした学会や講演会(例えば SIGLEX-MWE ワークショップ)が各地で開催されたりするなど、語学教育や応用言語学関連の学術行事でフォーミュラについての発表や議論を目にする機会は多い。

第二言語習得研究の学術書の出版事情を見ても、フォーミュラ研究の最先端をまとめた『Understanding formulaic language: A second language acquisition perspective』(Siyanova-Chanturia & Pellicer-Sánchez, 2019)が出版された他、気鋭の語彙研究者たちによるハンドブック『The Routledge

handbook of vocabulary studies』(Webb(Ed.), 2019)のうち実に8章分がもっぱらフォーミュラ関連の記述に充てられている(巻末の「フォーミュラの基本文献紹介」参照)。

Information and Communication Technology(ICT)活用教育の分野を見ても、語連鎖(Lexical bundles; 本書のフォーミュラの意味概念に含まれる)に着目した英語学術論文執筆を支援する電子ツール「AWSuM(Academic Word Suggestion Machine)」が開発され(水本(編), 2017)、オンライン上で無料公開されている。また、入試英語・現代英米語・学習者作文など様々なコーパス分析をふまえた English N-gram List for Japanese Learners of English(ENL-J)が開発され(石川, 2019)、これもオンライン上で無料公開されている。これらの諸例が示す通り、フォーミュラは近年ますます注目を集める重要なトピックであるといえる。

本書の概要

本書は、外国語教育メディア学会(LET)関西支部基礎理論研究部会の6年に及ぶプロジェクト研究の成果をまとめたものである。フォーミュラを卒論・修論で研究したいという学生や研究入門者を想定し、フォーミュラを入門的に解説しつつ、親密度(横川(編), 2006)の知見を組み入れた独自の実験用・教育用リストの作成経緯と研究成果について紹介し、それを活用した研究事例や、フォーミュラの実用・教育的展望などについて説明するものである。

本書の構成

一口にフォーミュラといっても、その意味内容や定義方法は研究者によって異なり、フォーミュラの心的機構をめぐって盛んに議論・研究が行われてきた。第1部では、フォーミュラをめぐる理論的背景や先行研究について、処理・貯蔵両面から入門的・導入的に検討し、フォーミュラ研究のための背景や主要先行研究を概観する。日本語で書かれたフォーミュラ研究入門は少なく、特にフォーミュラへの認知心理学的アプローチを理解するうえで第1

部は最適である。第2部では、本研究部会のプロジェクト研究である大規模フォーミュラ親密度調査について、その背景と方法論について議論する。第3部ではプロジェクト研究の結果を報告し、全体分析・品詞別分析・習熟度別分析について詳説する。続く第4部では、でき上がったフォーミュラ親密度リストを活用した研究例をいくつか紹介する。第5部では視野を広げ、フォーミュラと英語の学習・教育全般について、音韻の特徴、初期英語学習、電子教材開発など様々な観点から検討する。終章では、フォーミュラをベースにした第二言語習得モデルに向けて最新の理論的知見を組み込みながら議論し、論を閉じる。さらに、付録として、フォーミュラ研究を計画するうえで役立つ重要文献紹介や、本プロジェクト研究の成果であるフォーミュラ親密度リストを提供する。本書が、フォーミュラ研究を志す研究者や教育者にとって示唆に富むものであれば、誠に幸甚である。

目 次

はじめに	iii
第1部 フォーミュラ入門	1
第1章 フォーミュラの定義	3
1. フォーミュラとは	3
2. フォーミュラの定義および用語	4
まとめ	10
第2章 フォーミュラの役割	12
1. 言語習得とフォーミュラ処理	12
2. フォーミュラの処理効率性	15
まとめ	18
第2部 フォーミュラ親密度研究—その背景と方法—	21
第1章 背景	23
1. はじめに	23
2. 親密度と頻度	23
3. 日本語話者英語学習者を対象とした英単語親密度について	25
4. 言語処理におけるフォーミュラの役割とフォーミュラ 親密度調査の必要性	26
5. フォーミュラリストの選定	27
まとめ	27
第2章 方法	29
1. はじめに	29
2. 先行研究	29
3. フォーミュラ親密度リスト作成方法	30
4. データ収集手順	32

4.1 協力者	32
4.2 Web アンケート調査.....	33
4.3 実施方法および実施環境	36
5. おわりに	36
まとめ.....	37
 第3部 フォーミュラ親密度研究—結果と考察—	39
第1章 全体的傾向	41
1. はじめに	41
2. 英単語の親密度に関する先行研究	42
3. フォーミュラの親密度と頻度の関係.....	43
4. フォーミュラの親密度と長さの関係.....	45
5. 親密度評定平均値が低く BNC 頻度数が高い項目について....	47
6. 親密度評定平均値が高く BNC 頻度数が低い項目について....	47
まとめ.....	48
第2章 品詞の観点から	49
1. はじめに	49
2. 品詞という観点について	49
3. フォーミュラの品詞タグ付けの基準.....	50
4. 記述統計	51
5. 推計統計	52
6. 品詞による違い.....	53
まとめ.....	55
第3章 習熟度要因からの考察	57
1. はじめに	57
2. 調査データ(英語習熟度別3群)	58
3. 親密度の高い表現と低い表現	59
3.1 親密度評定の平均値に関する記述統計	59
3.2 親密度評定平均順位から見たフォーミュラの特徴	60

4. 親密度と頻度の比較.....	68
4.1 親密度評定平均順位と頻度順位の相関	68
4.2 親密度順位と頻度順位の比較から見た特徴	68
4.2.1 親密度順位が頻度順位より上位(親密度>頻度)	68
4.2.2 親密度順位が頻度順位より下位(親密度<頻度)	72
5. 考察.....	75
6. おわりに	76
まとめ.....	77
 第4部 フォーミュラ親密度リストを活用した研究例.....	79
第1章 フォーミュラ親密度リストの信頼性の検証	81
1. はじめに	81
2. 信頼性検討の必要性.....	81
3. 目的.....	82
4. 方法.....	82
5. 結果と考察.....	83
5.1 クロンバック α 信頼性検定	83
5.2 全体分析	84
6. 結論.....	85
まとめ.....	86
第2章 親密度、出現頻度がフォーミュラの認知処理に及ぼす影響 心理学実験ソフトを用いた行動実験による検証	87
1. はじめに	87
2. 調査方法	87
2.1 リサーチ・クエスション	87
2.2 実験参加者	88
2.3 調査に用いられた実験刺激について	88
2.4 調査方法	88
3. 結果.....	89

3.1 反応時間	89
3.2 正答率	90
3.3 相関分析	90
3.4 結果まとめ	91
4. 今後の課題と展望	91
まとめ	94
第3章 情動関与処理とフォーミュラ情動価リストの作成	96
1. はじめに：情動論的転回	96
2. 「情動と認知」から「情動的認知＝認知的情動」へ	97
3. ミクロレベル情動と外国語語彙記憶：情動関与処理仮説	99
4. フォーミュラ情動価リスト作成	100
5. 結論	103
まとめ	104
第5部 フォーミュラの応用研究・教育実践	105
第1章 英語二項表現の音韻的制約に対する日本語母語話者の	
 敏感性を探る	107
1. 目的	107
2. 先行研究	108
3. 調査	110
4. 結果と考察	112
4.1 全体的な傾向	112
4.2 個別分析	114
5. 結論	115
まとめ	117
第2章 初期英語学習者にフォーミュラの知見をどのように	
 活用するか	120
1. はじめに	120
2. 初級英語学習者とフォーミュラ（定型表現）	121

3. 小学校で取り扱われるフォーミュラ(定型表現)	122
4. 中学校で取り扱われるフォーミュラ(定型表現)	124
5. 授業での言語活動例：定型表現の定着のために	127
まとめ	130
第3章 オンラインフォーミュラ学習システム	131
1. はじめに	131
2. 背景	132
2.1 間隔効果(Spacing Effect)	132
2.2 間隔学習とライトナーシステム (Spacing & The Leitner System)	133
2.3 語彙学習に関する諸知見	134
2.4 CVT の例え	134
3. ISRS(間接的間隔反復ソフトウェア Indirect Spaced Repetition Software)	135
まとめ	137
終章 フォーミュラをベースにした第二言語習得モデルに向けて	139
1. 用法基盤モデルとは?	139
2. 第二言語の用法基盤アプローチ	143
2.1 多読・多聴学習の効果	143
2.2 多読・多聴学習によるフォーミュラ・構文のプラクティス： Associative-Cognitive CREED などの考え方に基づく第二 言語の用法基盤アプローチ	145
3. 第二言語習得が目指す最終到達点：構造化されたフォーミュラ・ 構文目録(structured inventory of formula and constructions)	147
まとめ	148

フォーミュラの基本文献紹介	151
エピローグ：第二言語(外国語)の習得に否定証拠は必要？	157
付録：フォーミュラ親密度リスト	161
謝辞	175
参照文献	177
索引	187

第1章 フォーマーミュラの定義

● 概要 ●

本章では、フォーマーミュラ(定型表現)の基本的概念について、その定義と分類を通して概観する。さらにフォーマーミュラに関わる諸要因について、第一言語および第二言語の観点から考察する。

キーワード: フォーマーミュラ、定型表現、定義と分類

1. フォーマーミュラとは

私たちの脳内には膨大な語彙情報が記憶され、蓄積されている。人はこれらの情報を検索・参照しながら、ことばの理解や産出などの言語活動を行う。この記憶の集合体はメンタルレキシコン(mental lexicon: 心的辞書)と呼ばれる。メンタルレキシコンの中に貯蔵されている一つひとつの語彙の記憶は、意味や統語知識に関するレマ情報(lemma)とスペルなどの形態や発音などの音韻知識に関するレキシーム情報(lexeme)の二層構造と考えられている(図1参照。Levelt, 1989, 1993)。Aitchison(1987)は、成人英語母語話者であれば約5万語以上の語彙を心内に記憶していると推定する。

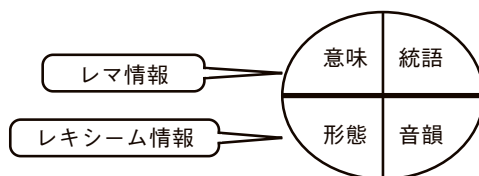


図1 メンタルレキシコン内の語彙の構造
(Levelt(1989, 1993)にもとづいて門田(2002)により作成)

ただし、紙の辞書と大きく異なるのは、メンタルレキシコン内に記録されているのは単語のみではないという点である。話し手の心内には意味の最小単位である形態素から、複数の単語から成る語連鎖を含めて実に多様なサイズの語彙項目が存在していると Wray(2008)は指摘する。実際に産出された

第2章 フォーミュラの役割

概要

本章では、フォーミュラの言語使用における役割と意義について、母語獲得および外国語学習の観点から考察する。さらにフォーミュラの一つの特徴とされる処理効率性について L1 および L2 研究の知見をもとに報告する。

キーワード：フォーミュラ処理、定型性、効率性

1. 言語習得とフォーミュラ処理

子どもは母語獲得プロセスにおいて2種類の学習方略を用いていることが報告されている。Peters(1977)は、英語を母語とする幼児の発話データを分析し、音素的に不完全ながらも、音韻的なまとまりを持った言語チャンク(language chunks)で発話が構成されることを報告した。大人の発話を真似して複雑な構造のものを音のひと固まりで発話する現象はゲシュタルト方略(a Gestalt strategy)と呼ばれ、一方で、単語ごとに発話を処理する方法は分析的方略(an Analytic strategy)と呼ばれる。幼児はこの2種類の方略を場面や目的などにより使い分けており、個人差は認められるが、音韻的特徴を帯びた語群を一気に発話するゲシュタルト方略が主軸となることが報告されている。この音の固まりと特定の意味が結びついた語群の習得はフォーミュラ知識獲得の最初のステップとなる。この2つの学習方略は、Sinclair(1991)が提唱する人間の言語産出における2原則と一致する。統語規則に基づき単語を組み合わせ文を産出する「自由選択原則(an open-choice principle)」とフォーミュラを用いて文産出を行う「イディオム原則(an idiom principle)」は、それぞれ上述の分析的方略とゲシュタルト方略に当たる。

Pawley and Syder(2000)は成人英語母語話者の自由発話データの分析から「一度に一節仮説(the one-clause-at-a-time hypothesis)」をもとに、フォーミュラのユニット性のある心的表象が言語情報処理の効率化に資することを検証した。本来、人が一回の発話プランニングで産出できるのは、節

第1章 背景

● 概要 ●

まず、語彙認知に影響を与える要因としてよく知られている頻度と比較しながら、親密度について概説する。そのうえで、日本語話者英語学習者を対象とした英単語親密度リスト作成の先行研究を紹介し、フォーミュラ親密度リスト作成に至る先行研究や理論的背景について説明する。

キーワード：親密度、頻度、主観性、先行研究、研究の背景、
フォーミュラ(定型表現)

1. はじめに

本章において重要な役割を果たす概念として「親密度」が挙げられる。本章は、「親密度」の理論的背景とこれまでの研究の展開を概観し、フォーミュラ親密度研究の必要性を説明するものである。

2. 親密度と頻度

親密度について検討する前に、親密度と類似する概念である頻度との違いについて概説する。単語の親密度(familiarity)とは人がある単語に対してどの程度よく見聞きすると感じているかの程度を表すものである。他方、語の出現頻度(frequency)とは、言語コーパスなどである語が何回使用されているかを数値化したものである。頻度が客観的な指標であるのに対し、親密度は、その人がどの程度出現すると考えているかという印象を示すという点で、主観的な出現頻度といえる。語長・獲得年齢・綴り字と発音の対応関係・近傍語の有無など、語彙処理に影響を与える要因として知られているものが数多くある中(Jiang, 2018)、頻度や親密度は実験研究の際に統制対象となることが多い。特に頻度は語彙研究において最も重視される要因の一つであり(Divjak, 2019)、処理要因の筆頭に位置づけられるものである。

その一方で、主観的頻度である親密度と客観的頻度は同じ現象を違う角度

第2章 方法

● 概要 ●

本章では、日本人英語学習者フォーミュラ親密度リストの作成方法とデータ収集の手順について述べる。まず、本調査内容を決めるにあたって参考にした先行研究を紹介する。次に、Martinez and Schmitt(2012)のフォーミュラリストに基づくフォーミュラの選定方法について述べる。そして、協力者や調査方法などのデータ収集手順について述べる。

キーワード：親密度リスト作成、フォーミュラ選定、データ収集

1. はじめに

本章では、英語学習者フォーミュラ親密度リストの作成のために行ったWeb アンケートの実施内容について主に述べる。調査手順や刺激の選定方法・統制方法など、研究デザインを組むうえで参考になる情報を提供する。

2. 先行研究

Shin and Nation(2008)は、頻度、統語的整合性、意味論に基づく基準を定め、口語において頻度の高い multiword unit を抽出してフォーミュラリストを作成した。Simpson-Vlach and Ellis(2010)は、頻度、共起語(n-grams)、統計、分布データなどの基準を定め、学術英語において有用なリストを作成した。Martinez and Schmitt(2012)は、各フォーミュラが形態素に相当するか、1語で表すことができるかなど、学習者にとっての難易度を判断できる基準を定めた。これらの先行研究のフォーミュラリストにおけるトップ 10 項目を以下に挙げる(表 1)。

第1章 全体的傾向

● 概要 ●

本章では英語学習者を対象としたフォーミュラ親密度データの全体的傾向を英単語の親密度調査の結果(横川(編), 2006)との比較から述べる。まず、英単語の親密度調査の結果と異なる傾向として、英語学習者のフォーミュラに対する親密度の評定平均値順位とBNCの頻度順位との相関は中程度に留まることがわかった。また、横川(編)(2006)では長い単語になるほど親密度が下がっていたが、フォーミュラでは同様の結果が得られないことがわかった。さらに、先行研究との違いが見られる原因となるいくつかの項目を取り上げて提示し、リストの活用方法の例から、教育的示唆を述べる。

キーワード: L2 メンタルレキシコン、英語学習者、フォーミュラの親密度

1. はじめに

本章では筆者たちが実施した英語学習者を対象としたフォーミュラ親密度調査の結果を、英単語の親密度調査の結果(横川(編), 2006)と照らし合わせながら報告する。

ことばの理解や産出の際にメンタルレキシコン内の語彙情報にアクセスする認知過程には、様々な要因が影響していることが知られている。そうした要因の中でよく取り上げられるものとして、語の生起頻度がある。語の生起頻度はコーパス(話しことばや書きことばを大量に収集し、電子化した言語データ)の中で、ある語の使用回数を計測することで得られる、客観的指標である。先行研究では、高頻度語は低頻度語に比べて音読潜時や各種判断課題等の反応時間が短く、誤答率が低いことがわかっている。このことは、通常、高頻度語が低頻度語よりもメンタルレキシコン内で検索されやすい状態にあることを示していると考えられている(第1部参照)。

近年、語の生起頻度とともによく取り上げられる要因に、親密度がある。親密度とは、「どの程度よく見聞きすると感じるか」という「なじみ度」を

第2章 品詞の観点から

● 概要 ●

フォーミュラ親密度リストのデータを、品詞の観点から探索的に分析した。まず品詞の重要性を説明したのち、品詞タグ付けのための基準について検討する。そして、本章の研究のフォーミュラリストの項目が品詞によってどのように異なりうるのか、構成語の種類による異なった傾向から何が示唆されるのかについて考察する。

キーワード：フォーミュラ、品詞、親密度

1. はじめに

前章で示唆されたように、単語親密度とフォーミュラ親密度は異なったものであり、フォーミュラ親密度の形成プロセスには単語親密度とは異なった様々な要因が関与していると考えられる。本章では品詞の観点から、フォーミュラについて概観する。

2. 品詞という観点について

本論に進む前に、品詞という分析観点を選択した理由について説明する。第一の理由として、言語知識や処理の重要な側面である文法の観点を取り入れる試みであることが挙げられる。統語論が言語学の主要領域の一つであることが示すように、言語知識や処理における統語(文法)の役割は軽視することができず、これは語彙知識や処理についても同様である。Levelt(1989)のメンタルレキシコンのモデルが示す通り、心内辞書の語彙エントリーのレマは意味的情報のみでなく文法的情報も含んでおり、語彙知識や処理は文法知識や処理と切り離すことができない。第二の理由として、品詞という文法的側面の実用可能性が挙げられる。文法側面の中でも、品詞という分け方は日本における英語学習者や英語教育関係者に馴染み深いものである。現に、多くの教科書や教材が品詞の観点から語彙を分類しており、名詞・動詞・形容詞・副詞といった分類法は知名度が高い。本フォーミュラ親密度リストの

第3章 習熟度要因からの考察

● 概要 ●

本章の目的は、先述したフォーミュラ親密度調査データを用いて、英語学習者の習熟度要因が、フォーミュラ親密度評定にどのように影響するか探索的に調査することである。まず、親密度評定平均値に関する基本統計量を述べた後、親密度順位上位・下位 50 項目の特徴を習熟度別に考察する。次に、親密度評定平均順位(以下、親密度順位)と BNC 頻度順位(以下、頻度順位)の相関関係を述べ、かつ、親密度順位と頻度順位の差が大きい項目を比較し、フォーミュラ親密度の習熟度別の特徴を明らかにする。

キーワード: 親密度評定平均順位、頻度順位、英語習熟度

1. はじめに

学習者の英語習熟度は、フォーミュラの親密度評定にどのように影響するのだろうか。本調査における親密度とは、あるフォーミュラに対して「どの程度よく見聞きすると感じているか、その程度(なじみ度)」を表している。よって、フォーミュラ知識(音韻・意味・統語・形態など)の習得程度を直接的に示すものではない。しかし、心的になじみ度が高い表現は、なじみ度の低い項目と比べて、学習者の心の中で出現する頻度(internal or mental frequency)が高く、フォーミュラ知識へのアクセスがされやすいため、習得につながりやすい状況にあると考えられる。よって、学習者の表現に対する親密度が習得度に関係している可能性がある。日本人英語学習者を対象とした単語レベルの親密度(横川(編), 2006)は、学習者の英語習熟度を反映しているとの調査報告もあり(弥永, 2010)、フォーミュラの親密度にも学習者の英語習熟度が影響すると推察される。そこで本章では、英語習熟度別に親密度評定順位の高い項目・低い項目をそれぞれ抽出し、それらの特徴を考察する。さらに、親密度評定平均順位と BNC(British National Corpus)の頻度順位の関係も習熟度別に検討する。頻度順位に関しては、本調査で用いた

第1章 フォーミュラ親密度リストの 信頼性の検証

● 概要 ●

フォーミュラ親密度リストを活用した応用研究の前に、リストの信頼性を確認する必要がある。リスト作成のデータを提供した参加者とは異なる大学生を対象にレプリケーション研究を行った。高い相関のあるデータが産出されるとともに推計統計についても一貫した結果となり、フォーミュラ親密度リストの再現性と信頼性が示された。

キーワード：フォーミュラ親密度リスト、信頼性、
レプリケーション研究

1. はじめに

第3部では、1,000人以上の日本の大学生を対象とした大規模調査に基づく英語フォーミュラ親密度リスト(磯辺ほか, 2016)の作成とその分析について検討した。外国語として英語を学ぶ日本語話者の評定をもとにした英語フォーミュラ親密度データベースは日本初であり、英語教育や応用言語学の研究や実践で広く活用が期待される。本章では、まずフォーミュラ親密度リストの信頼性を検討したうえで、本リストを活用した研究例について検討する。

2. 信頼性検討の必要性

データベースの作成にあたっては、データの信頼性(安定して一貫した結果が得られるかどうか)を検証することが重要である。前章で議論したフォーミュラ親密度リストは主観評定に基づくものであるが、もしも同様の調査を他の日本における英語学習者に対して実施した結果が全く異なるものであった場合や評定者間に一貫性のない場合は、リストは再現性がなく信頼性に乏しいものであるということになる。リストが信頼できるものであるかどうかを確かめるために信頼性を検証することは、応用研究を行うための第一優先事項であるといえる(Amano, Kasahara, & Kondo, 2007)。

第2章 親密度、出現頻度がフォーミュラの認知処理に及ぼす影響

心理学実験ソフトを用いた行動実験による検証

● 概要 ●

これまでの先行研究では、英語学習者の言語の認知処理において、一定の連鎖頻度をもつフォーミュラ(定型連鎖)は他の語連鎖と比較して処理の効率性について優位性をもつということが示唆されている(Isobe, 2011, 2014)。本章では、英語学習者を対象として収集したフォーミュラの親密度という指標がBNCコーパスにおける連鎖頻度と比較して、語連鎖の処理にどのように影響を与えるのか検証した。

キーワード：語連鎖親密度、語連鎖頻度、語順適格性判断課題、反応速度、正答率

1. はじめに

一定の連鎖頻度をもつ2語以上の語連鎖であるフォーミュラが他の語連鎖に比べて速く正確に処理されるということはこれまでの先行研究によって明らかになっているが(Isobe, 2011, 2014)、語連鎖の処理に対して連鎖親密度がどのように影響を及ぼすのかはまだ明らかになっていない。これまで先行研究では単語認知において単語親密度が一定の影響を及ぼすことが示唆されているが(横川(編), 2006)、フォーミュラにおいても同様の傾向が見られるであろうか。本章ではIsobe(2011)をもとに語順適格性判断課題を用いて、語連鎖親密度と語連鎖頻度の違いがどのように反応時間、正答率などの行動データに影響を及ぼすのかを検証した。

2. 調査方法

2.1 リサーチ・クエスション

フォーミュラに対する語順適格性判断の正答率と反応時間に、フォーミュラ親密度評定調査によって得られた語連鎖親密度とBNCコーパスにおける

第1章 英語二項表現の音韻的制約に対する 日本語母語話者の敏感性を探る

● 概要 ●

本研究の目的は、英語のフォーミュラの中でも up and down や safe and sound といった二項表現(binomials)に焦点を当て、その音韻構造に日本語母語話者がどの程度敏感(sensitive)であるかを調査することである。大学生約 200 名を対象に、英和辞典から抽出した二項表現を用いてその語順を二肢強制選択する調査を行った結果、日本語母語話者がおおむね音韻的制約に敏感であることが判明した。

キーワード：二項表現、語順、音韻的制約、敏感性

1. 目的

英語のフォーミュラの中には、up and down や safe and sound のように「A and (or) B」の構造で語順が固定し、要素の順序を変えることができない句が存在する。Malkiel(1959)はこれを順序の変更ができない二項表現(irreversible binomials)と呼び、Ross(1976)や Aitchison(2003)は凍結表現(freezes)と呼んでいる。

句動詞やイディオムと同じように、このような表現を正確に使うことで、流暢な発話ができ、会話相手の理解度も高くなる。and や or で結ばれた語の順序を間違えても、英語母語話者の理解は可能であるが、違和感を覚えることになるであろう。それに関連して、Siyanova-Chanturia and Pellicer-Sánchez(2019)は“in order to reach high levels of proficiency, second language learners must be able to use appropriately the many and varied formulaic sequences that exist in language”と指摘している。

この語順には Ross(1976)が指摘するように、意味的制約や音韻的制約が働いていると考えられる。本研究では、英語の A and B 形式の二項表現(binomials)における語順に焦点を当て、日本語を母語とする英語学習者が音韻的要因にどの程度敏感であるかを吟味した。より具体的には、強勢など

第2章 初期英語学習者にフォーミュラの知見をどのように活用するか

● 概要 ●

本章では小学生や中学生などの初級英語学習者を対象にフォーミュラをどのように理解し、取り込み、コミュニケーションのために効果的に使えるようにするかについて考える。まずフォーミュラの理解について場面や状況を与えインプットを行い、次にフォーミュラを効果的に用いた言語活動を通して、会話やコミュニケーションを行う。そして成功体験を得ることで自信や自己肯定感をつけさせたい。

キーワード：初級英語学習者、定型表現依存型運用能力、事例学習、言語活動

1. はじめに

学習指導要領の改訂により、2020年度から小学校中学年で「外国語活動」が、高学年で教科「外国語」が導入された。その目標は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を伸ばすことである。その中で、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による五つの領域（「聞くこと」「読むこと」「話すこと〔やり取り〕」「話すこと〔発表〕」「書くこと」）の言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地・基礎的能力を育成することが求められている。さらに、外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについての知識を理解するとともに、実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身につけるようにするとあり、その際、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる力を養うことが求められている。しかしながら、初学者にとって、複数の単語を文法的に組み合わせ文章を産出することは難しい。初学者の文産出の負担を軽減するために、最初は場面や働き、状況に応じて決まり文句や定型表現などのフォーミュラを用いてやりとりを行うことが望ましい。言語処理の負荷を軽減する

第3章 オンラインフォーミュラ学習システム

● 概要 ●

本章ではオンラインフォーミュラ学習システムについて説明する。まず、背景を説明し、次に間接的間隔反復学習ソフトウェア(Indirect Spaced Repetition Software; ISRS)について掘り下げ、そして効果的な英語学習を目的とする ISRS の活用方法について詳しく説明する。

キーワード：記憶、間隔効果、ライトナーシステム、
間隔反復学習システム、ISRS

1. はじめに

効果的に語彙を習得するために重要なこととして、(1)適切な語彙リスト
(2)処理の質 (3)習慣的な勉強の3点が挙げられる。

(1) 語彙リスト

適切な語彙リストを選ぶことは大変重要である(Nation, 2016)。本書のフォーミュラ親密度リストは、英語教育研究や実践の用に供するために作成したリストであるが、語彙力を伸ばしながら文章の理解力および産出能力を高めることができるように構成されている。

さらに、フォーミュラ親密度リストは親密度、品詞、アルファベット、フォーミュラ構成語数などの順に並べ替えることが可能であり、学習の目的に応じてカスタマイズすることができる。

(2) 処理の質

言語学習のうえでは、単語や句・文の理解(インプット)だけではなく、産出能力(アウトプット)も向上させることが重要である。そのためには、リスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの4技能をバランスよく取り入れ、学習の質を高めることが大切である。